

女の魚売り

小川未明

青空文庫

ある空そらの赤あかい、晩方ばんがたのことでもあります。

海うみの方ほうから、若い女わかおんなが、かごの中なかにたくさんのたいを入れて、てんびん棒ぼうでかついで村むらの中なかへはいつてきました。

「たいは、いりませんか。たいを買かつてください。」と、若い女わかおんなはいつて歩あるきました。

この村むらに、一軒けんの金持かねもちが住すんでいました。その家うちはすぎの木きや、葉はの色いろの黒くろずんだ、かしの木きなどで取り囲とまれていました。そして、その広ひろい屋敷やしきの周囲まわりには、土手どてが築きずいてあつて、その土手てへは、だれも登のぼれないように、とげのある、いろいろの木きなどが植うえてありました。

わかおんな さかなう
若い女の魚売りは、その屋敷やしきについている門もんから、しんとした内うちへ入はいってゆきました。

「たいを買かってください。」と、女おんなはいいました。

この家うちは、金持かねもちでありながら、たいへん吝けち嗇であるというこ
とを、村むらでは、みんな知らぬものがないくらいでした。

「どれ、たいを見みせろ。」という声こえがすると、この家うちの主人しゅじんが
顔かおを出だしました。

おんな さかなう
女の魚売りは、かごを下したに置おいて、たいを主人しゅじんに見みせまし
た。林はやしの間あいだをとおして、西にしの空そらの赤あかい色いろが見みられたのです。その
空そらの色いろに負まけずに、たいの色いろは紅あかくあつたのでした。

「このたいは、新あたらしいか。」と、この家うちの主人しゅじんは聞ききました。

「あたらしいにも、なんにも、もうすこし前まで、かごの中で、ぴんぴんはねていたのです。」と、女は、主人の顔を見上げて答えました。

「なに、昨日捕れたのだろう。」と、主人は冷笑いながらいきました。すると、女は、ほおをすこし赤くしながら、

「まだ、生きています。」と答えました。

主人は、じつと、かごの中のたいをながめていました。ほんとうに、たいのうろこは、一つ一つ、紅い貝がらのように、ぬれて光っています。目は、真っ黒に、なんでも見えるように澄んでいました。

「なにつ、生きているって。こんなに、じつとして動かないもの

が、生きているはずがない。死んでいるものを、生きているなんてうそをつくな。」と、主人しゅじんはいいました。

「ほんとうに、海うみから、上あがったばかりなのですから、どうか買かつてください。」

「こんな古い魚ふるさかなは、うんと安くやすまければ買かつてやるが、それでなければいらぬ。」と、主人しゅじんはいいました。

「まだ、これで生きています。海うみの水みづに入はいれば、泳およいではねます。どうかそういうわかないで買かつてください。」

「もし、この魚さかなが生いきていたら、みんな買かつてやる。もし、この魚さかなが死しんでいたら、みんなおれに、ただでくれるか。」と、主人しゅじんはいいました。

「ほんとうに、生きていましたら、これをみんな買ってくださいますか。」と、女はたずねました。

「ああ、これだけのたいの金を払ってやる。そのかわり死んでいたら、みんなこのたいをただでくれるか。」と、女の魚売りに向かつて念を押しました。

「お金はいりません。みんなさしあげます。」と、女は答えました。

主人は、かごの中から、一ぴきのたいをつまみあげて、宙にぶらさげました。そのたいは、冷たく、大きかったが、じつとしてはねなかつた。

「これで、おまえは、生きていくというのか？」と、主人は、

おんなみ
女を見て冷笑あざわらいました。

おんな
女は、たいと、主人しゅじんとを見くらべていましたが、

「さきほども申もうしたように、海うみの水みずに入いれると泳およぎます。どうか
海うみまで私わたしといっしよにきてください。」と、女おんなは頼たのみました。

主人しゅじんは、一里りや、一里半りはん歩いていっても、これだけのたいが、
みんな自分じぶんのものになるのだと考かんえると、ゆくことをいとう氣きに
はなれませんでした。

「ゆくとも、まあ、待まってくれ。」と、主人しゅじんはいって、支度したくを
しました。そして、やがて、女おんなは、かごをかついで先さきに立たち、主しゅ
人じんは、その後あとからついて門もんを出でて、まっすぐに、海かい岸がんの方ほうを
指さして道みちを急いそいだのです。

だんだん海に近づくと、風が、強く吹いていました。そして、松の木が、風に吹かれて鳴っている。そのあいまに、ド、ド、ド——という海鳴りの音がしていたのでした。

ふたり
二人は、一つの砂山を上がりますと、もう、目の前には、真つ青な海が、浮き上がっていました。そして波の音が、絶え間なく起こっています。海にも、夕日が赤々とさしていました。白帆は、酒に酔ったように、ほんのりと色づいて、青い波の間に、見えたり消えたりしていました。陸に近いところには、岩が重なり合っていて、その岩に打突かると波のしぶきが、霧となつて、夕暮れの空に細かく光って舞い上がっています。

おんな
女は、岩の近くにきて、肩からてんびん棒をはずして、かごを

湿しめつた砂すなの上うえに下おろしました。

「さあ、たいを海うみに放はなすのだ。」と、金持かねもちはいいました。

「よく、見みていてください。」と、若い女わかおんなはいいました。そして、

かごの中なかのたいを、一なびきずつ白しろい手てですくうようにして、取とり上あげました。

たいは、いま、ふたたび故郷こきように帰かえろうとします。女おんなが、紅あかい

たいを、波なみの間あいだに落おとしますと、たいは、おどつて、はや、その姿すがたを青あお黒くろい海うみの底そこに隠かくしたのです。

「あれは波なみにさらわれたのだ。」と、金持かねもちは信しんじませんでした。

「さあ、今こんど度は、よく見みていてください。」と、女おんなはいつて、第だい

二だい、第だい三だい、第だい四だい、というふうに、一なびきずつたいを海うみに放はなしまし

た。

たいは喜んで、高く波の間におどり上がって、しぶきを金持ちの顔にかけてゆくのでありました。

「どうぞごぎいますか。」と、女は、すっかりたいを海に放してしまつたときに、いいました。

金持ちは、ぼんやりとして、見ていましたが、これは、夢ではないかと思つたのです。

「さあ、私に、お約束通り、たいのお金を払ってください。」と、女は、金持ちに向かつていいました。

すると、金持ちは、いちはやく、逃げ支度をして、
「だって、自分のものにならないものに、金を払う必要がない。」

といいました。

女おんなは、あきれた顔かおつきをしながら、金持かねもちを見て、

「生きていたら、お金かねをくださるお約束やくそくではありませんか。」
といいました。

「そんな金かねは持もたない。」と、金持かねもちはいい捨すてて、そこから駈かけ出だしました。そして、後あとも振ふり向むかず、どんどん、あちらへ逃にげていつてしまいました。

女おんなは、途方とほうに暮くれて、波打なみうちぎわに立たったまま泣ないていました。そのとき、空そらの色いろは、しだいによすれて、やがて、空そらも、海うみも、まったく、青あお黒くろくなつてしまつたのであります。

空そらの色いろが銀ぎん色いろに光ひかつて、生なま暖あたかな日ひのことであります。

年をとつた女が、浜の方から、かごの中に、たくさんのたらをいれて売りにまいりました。

「たらを買ってくださいませんか。」

女はこういつて、村の中を歩きまわりました。たらは、冬の日おんなに捕れる魚おんなであります。こんなに、暖かになつてから、捕れることはありません。みんな、北おんなの寒おんない、寒おんない、海おんなの方おんなにいつてしまふからであります。

「いまごろたらが捕れるなんて、不思議なことですね。」

村の人たちは、こう語り合つて、だれも、その女の持つてきたたらを買おうというものはありませんでした。

「安く、まけておきますから、たらを買ってください。」と、女

はいいました。

その女は、よく見ると、すぐめでありました。人々は、その女の顔と、かごの中のたらとを見くらべて、買おうとするものはありませんでした。

おんな、金持ちの家の門をいってゆきました。

「たらを買ってくださいまし。」と、女はいいました。

「いらぬ。」と、金持ちは答えました。

「まけますから、買ってください。」と、女はいつた。

すると、金持ちは、戸口に出て、女の持ってきたたらを見ました。

「いま時分、たらがどうして捕れたらう。」と、金持ちは不思議

がりました。

「今朝、たくさん上がつたのです。」と、女は答えた。

「この生暖かな陽気じゃ、たらは腐つてしまうだろう。うんとまけてゆけば買ってもいい。」

「いくらにでもまけてゆきます。」と、女はいいました。

金持ちは、うんとまけさして、みんなこのたらを買いました。

そして、その晩は家じゅうのものが腹いっぱい食べたのであります。

すがめの女が、浜の方へ帰った時分から、南の風が吹きはじめました。あまり暖かなもので、遅咲きの花までが、一時に咲き、地の下からは、いろいろの草が、一夜の中に芽を出したのであり

ます。だれでも、頭痛づつうがするといわないものがないほどであります。

たらを腹はらいっぱい食べた金持ちかねもの一家かは、どうしたことか、その夜よから髪かみの毛けがばらばらと抜ぬけて、それから幾いくにち日もたたないうちに、みんなぴかぴか光ひかるはげ頭あたまになってしまいました。

「たらにあたつたのだ。」と、みんなはいいました。

金持ちかねもは、たらにあたつたことから、いつかたいを海うみに放はなして、金かねを払はらわないで逃にげてきたことを思おもい出だしました。一家かのものが、生うまれもつかない、あさましい姿すがたになると、金持ちかねもは、いままでした、いろいろのよくないことが後こうかい悔かいされました。そこで、金かね持ちもは村むらに寺てらを建たてました。自分じぶんは、ちようどはげ頭あたまなので、そ

の寺てらの坊ぼうさんになりました。身みに黒くろい衣ころもをまとつて、一日いちにち、御堂おどうの中なかでお経きようを讀よんで暮くらしました。

村むらの人ひと々びとも、いつかは、その坊ぼうさんを信しんずるようになりまし
たが、坊ぼうさんは、とうとう年としをとつて、その寺てらの中なかで死しんでしま
つたのです。

後あとには、寺てらが残のこりました。寺てらのまわりには、すぎの木きがこんも
りとしげつています。そして、いつまでも、晩方ばんがたの風かぜに、さび
しく吹ふかれて、その黒くろずんだ葉はをゆすつています。桜さくらの花はなの咲さく
ころには、この寺てらの境けい内だいにも桜さくらの花はなが咲さくのであります。

空そらの赤あかい晩方ばんがた、たいが捕とれて、この村むらへ売うりにきたときは、
きつといいことがあるというので、村むらの人ひと々びとは争あらそ

いを買かいます。けれど、季節きせつに遅おくれたたらは、買かうと悪わるいことがあると、売うりにきても、けっして買かわないのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「赤い鳥」

1922（大正11）年4月

※表題は底本では、「女《おんな》の魚売《さかなう》り」となっています。

※初出時の表題は「女の魚売」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年10月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

女の魚売り

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>